

セミナー3 『十二夜』を読む

コーディネイター： 中村 未樹（大阪大学准教授）

メンバー： 奥山 厚子（名古屋大学大学院博士後期課程）

高根 広大（法政大学兼任講師）

田中 愛美（早稲田大学大学院修士課程）

廣野 允樹（関西学院大学大学院博士前期課程）

松山 響子（駒沢女子大学准教授）

コメンテーター： 前原 澄子（武庫川女子大学教授）

シェイクスピアの喜劇『十二夜』についてはジェンダー、セクシャリティ、変装、階級、地理学、宗教、祝祭性、ジャンルなど様々な観点からの分析がこれまで行われてきた。また、舞台では多様な演出による上演が試みられており、歌舞伎や映画など異なるメディアにおける翻案も制作されている。本セミナーは、先行研究、及び上演・翻案の状況を踏まえながら、『十二夜』の新たな解釈の可能性を探っていくことを目的とした。

セミナーに参加したメンバーの研究テーマは、熊いじめ、異性装、贈与交換、友情、ライトノベル版の翻案というようにヴァリエティに富んだものであった。これらのテーマについてセミナー・メンバーと共に議論を行っていくことによって、「『十二夜』を読む」ということの面白さを改めて実感することができた。

本セミナーは従来の若手ワークショップに替わるものであったため、学会担当委員の先生方にご助言を頂きながらセミナーを進めていった。メンバーには二回原稿を作成してもらい、各段階において他のメンバー、そしてコメンテーター（及び中村）にコメントを提出していただきながら意見交換を行っていった。最後に出来上がった各メンバーの最終稿は、4か月間における研究の成果を十分に示したものとなった。

セミナーのイントロダクション、及び各メンバーの発表の要旨は以下のとおりである。

中村未樹 「イントロダクション」

17世紀から現在に至るまでの『十二夜』の批評と演出、翻案の例をいくつか紹介しながら、作品の特徴と検討すべき問題点について確認した。まずジョン・マニングガムの観劇記録、サミュエル・ジョンソン、ウィリアム・ハズリットによる『十二夜』に関するコメントを紹介し、喜劇性、面白さと **credibility**、教訓性などの問題を取り上げた。次に、喜劇というジャンルをめぐる問題、劇におけるジェンダーとセクシャリティ、最近の舞台・翻案における新たな解釈の試み、『十二夜』における混淆性などの点について近年の研究を紹介しながら概説した。

廣野允樹 「*Twelfth Night*における熊虐めと異教徒」

『十二夜』では、堅物執事マルヴォーリオがマライヤやサー・トビーらに騙され、虐められる場面は、よく「熊虐め」と重ねられる。この『十二夜』の作品内においては、熊虐めのメタファーが多く見られる。マルヴォーリオが熊のようにいじめられる理由の一つは、彼がピューリタンの性質を持っているからであると考えられる。作品の中では、彼は「異教徒」としての烙印を押されていることにも注目できる。その「異教徒」である彼が虐められ、晒される場面は当時民衆の娯楽であった異教徒の処刑とも重ねられると考えることができる。

田中愛美 「ヴァイオラの男装に対する罪悪感」

シェイクスピア作品の他の男装のヒロインと異なるのは、ヴァイオラが異性装に対して罪悪感を抱くことである。さらにこの罪悪感は彼女が最初から抱いていたものではなく、ヴァイオラ、オーシーノ、オリヴィアのもつれた恋愛感情が引き金となっている。こうした負の感情はヴァイオラの現状打破への想いが強く抑圧されたことで引き起こされた感情である。しかしその一方で、男装することで得られた経験の中で、オーシーノへの献身的な愛情を貫き、自分の女性性を認識し、アイデンティティを見つめ直すことができたのではないだろうか。

奥山厚子 「『十二夜』における贈与・交換とコミュニティの形成」

『十二夜』の贈与交換する場面では人物間の関係が変化し状況が展開することがある。モースが贈与は義務的で束縛的な行為であるというように、『十二夜』では全体として互惠主義に基づく交換の原則がみられる。個人の陶醉や快楽が恋・陰謀などと喜劇的に絡まり合い、集団内で贈与・交換する行為を通して、登場人物たちは最終的には不完全ながらも社会的な調和へと至る。双子の兄妹が取り違えを乗り越えて結婚するというこの幸せな終局は、登場人物たちが集団生活の抜けられない相互関係を受け入ることにより可能になったといえる。

高根広大 「ヴァイオラ/シザーリオの二重の愛」

公爵がヴァイオラに求愛する急展開は、ヴァイオラが男装している際に培われた、公爵との親愛が導いたものである。ルネサンス期に受容された友情論では、優れた助言をすることができる男性同士にこそ真の絆があり得るとされたが、同様に『十二夜』の公爵は男女間の恋愛においても、男性こそが真の愛情を持てると考えていた。ところが、ヴァイオラは公爵の相談役として仕えることで、むしろ女性こそ真の絆を構築できるという可能性を示す。ヴァイオラ的女性としての愛は、主君に仕えるシザーリオとしての愛を通して、報われるのである。

松山響子 「読みやすい入門編？ラノベ型『十二夜』」

吉村りりかの『十二夜-身代わり小姓と不機嫌な公爵-(ビーズログ文庫)』はライトノベル形式のシェイクスピアの『十二夜』の翻案である。シェイクスピア劇の恋愛要素を強調することで古典作品に対する心理的なハードルを下げ、そして古典をよりわかりやすい形式で提示している。ライトノベルという形式を用い、副題や少女漫画的な表紙の絵柄によってシェイクスピアにふれたことのない読者層に対して作品への興味あるいは共感を誘い、登場人物の心理描写を詳細に書き込むことにより、抵抗なく登場人物たちの「恋愛」を楽しむことができるのである。

セミナーの後半においては、前原先生より各発表についてコメントを頂いた。その後、各発表に関してメンバー同士での質疑応答を行った。最後にフロアの先生方よりご質問をいただいた。

今回のセミナーにおけるメンバーの方々の研究内容は、近年の『十二夜』をめぐる批評の動向を踏まえた上で、その成果をさらにアップデートしていこうとする意欲的なものであった。結果として、本セミナーでは『十二夜』という作品の同時代的また現代的な意義を様々な面において確認することができた。最後になるが、本セミナーの運営についてご指導していただいた学会担当委員の先生方、そしてセミナーに関して多くのご助言をいただいた前原先生に深く感謝したい。

